

[事業名称]

日中友好大学生訪中団

[開催日時]

2014年9月1日～8日

[開催場所]

中国の北京、西安、杭州、上海を訪問

[主催者・共催者等]

(招へい団体) 中日友好協会 (実施団体) 公益社団法人日中友好協会

[事業内容]

(公社) 日中友好協会は9月1日から8日まで、日中友好大学生訪中団101人を派遣した。中日友好協会が受け入れ、北京、西安、杭州、上海を訪問し、現地の学生と交流した。

訪中団は7月に駐日中国大使館を通じて協会に派遣の依頼があった。協会は短い準備期間の中で、関東周辺の大学関係者に声をかけて書類審査を行い、学生を募集。小野寺喜一郎常務理事が団長を、永田哲二常務理事が副団長を務めた。団員たちは8月17日

と31日に都内で行われた事前研修会に参加し、班長をはじめとする役割分担を決めたほか、交流活動で披露するパフォーマンスなどを話し合った。

9月1日午後、一行は北京に到着。中日友好協会のスタッフの出迎えを受け、万里の長城を登った。

翌2日は中国人民対外友好協会の講堂で、劉徳有・元中国文化次官の講演を聴講。劉氏は「中国と日本は多くの共通の文化を持つが、それだけで相手の国を判断するのは危ない」と団員を諭した。同日午後は、中国56の全ての民族の学生が在籍する中央民族大学を訪問。同大の学生とアニメや音楽などの話題で雑談し、団員は中国の学生が自分たちよりも日本のアニメに詳しいことに驚いた。交流会では宋敏・同大副学長の歓迎のあいさつに続いて、少数民族の学生たちによる多彩な踊りが披露された。日本側はソーラン節で応え、アンコールの声がかかると少数民族の学生らを交えて踊り、場内を沸かせた。夜は中日友協主催の歓迎宴が貴賓楼飯店の荘厳な雰囲気の中で開かれ、鎌田尚之



歓迎宴で盆踊りを踊る団員たち。貴賓楼飯店で

さん（慶應義塾大学4年）が司会を務めた。中日友協の王秀雲副会長と関立彤秘書長があいさつし、王副会長は「現地での実体験を通じて中国を理解し、知り得たことを家族や友人に伝えてほしい」と述べた。歓迎宴では団員が浴衣姿で盆踊りを披露し、「一起跳舞吧（一緒に踊りましょう）」の掛け声で参加者を巻き込み、全員で輪になって踊りを楽しんだ。

共通の関心ごとで心の距離が縮まる

9月3日からは西安を訪れ、兵馬俑博物館などを見学。兵馬俑を生で見た団員の一人は「予想よりも大きかった」と驚いた。西安は古都だけあって、バスの移動中にも秦の始皇帝陵などの見どころが続き、団員は興味津々の様子だった。

翌日は、中国の五大開発区の一つである西安高新技术産業開発区を見学。同区は現代中国の科学技術の中心地で、日系を含む多くの外資系企業が進出している。団員



日中の大学生が自由に話し合った。杭州師範大学で

はパネルや模型で、勢いすさまじい中国の経済発展の実像を知った。

その後訪れた西安外国語大学では班ごとに同大の学生と交流。キャンパスライフや恋愛観などについて互いの率直な疑問を投げ掛け合った。各班で話した内容を報告した発表会では、互いの恋愛観に関する内容が多く、休日の過ごし方は映画やカラオケ、飲み会など共通しており、双方の学生の心の距離は一気に縮まったようだった。

一行は同日、西安培華学院も訪問。姜波・同院理事長の案内で学院内を参観した。当日は授業の一環として軍事訓練が行われており、日本の団員は改めて中国との大学生活の違いを認識した。その後、同院主催の歓迎宴が開かれ、同院の学生もたくさん参加。出し物と食事を楽しみつつ、歓談に花を咲かせた。滞在中、団員からは「もう少し一般庶民の料理も食べたい」との声が上がっており、同宴での料理はやや庶民的な味付けで、後にそれが学生食堂のメニューだと知り、団員は「とてもおいしかった」と満足した。

友好の種に水をあげ続けたい

訪中も終盤に差し掛かると、団員たちは、歩行者よりも車が優先されがちな現状など社会の発展に市民のマナーが追い付いていない一面があることも知る。他方、中国人学生との交流にも慣れ、杭州師範大学の学生とは大いに盛り上がった。交流では持参した日本の漫画本や地図帳を用いたり、辞書に頼らず伝えようとしたりする学生もおり、キャンパス見学中には手をつないで歩くほど仲良くなった日中の女子学生も見られた。同大は広く、緑も豊かで、スーパーもあり、団員は「一つの街みたい」とうらやましがっ

た。

杭州市の西溪賓館で行われた訪中を締めくくる歓送宴会では、北京から駆けつけた関立彤秘書長があいさつし、陳愛珍・浙江省人民対外友好協会専職副会長が乾杯の音頭を取った。今訪中で学生総代表を務めた松本祐輝さん（東京外国語大学1年）は「友好の種に水をあげ続けなければならない」と決意を述べた。



漫画本を通じて交流する団員（右）



協会が実施したアンケートでは、大学生のほとんどが「訪中を通じて中国への印象が良くなった」と回答。日中友好の種はしっかりまかれたようだ。最終日の上海では、夕食も早々に切り上げ、街の様子を見に行く学生が多かった。連日の疲れも見せず、やはり若者はパワーがみなぎっている。こうした若者が日中の懸け橋として努力してくれることに頼もしさを感じる。小野寺団長は今回の旅を振り返り、「次世代を担う若者たちが率直な意見交換した。歴史的な訪中団となった」と語った。（随行・田島恵輔）

■訪中を通じて感じたこと■

石橋怜 慶應義塾大学3年

中国人はモラルが低く、サービスが良くないと聞いていましたが、実際に接してみるととても気さくで親切な方が多く、印象が変わりました。また、中国は古い歴史の保護はもちろん、最新の科学技術にも力を入れ、国を発展させていこうとする姿勢も伝わってきました。経済格差に関して、今回は恵まれた側面は見られましたが、そうでない面は時間が短く感じ取れませんでした。現地の学生との交流では、彼らに非常に近いものを感じた一方で、学習に費やす時間の長さには驚かされました。



別れを惜しみ抱き合う学生たち

森下朋美 東京外国語大学1年

以前から中国が大好きでしたが、日本の中国に関する報道は中国に対して悪い印象を

持ってしまうようなものが多く、複雑な気持ちでした。今回、実際に現地の大学生と交流し、彼らが友好的で、勤勉であり、同じ関心ごとを持つ若者だと分かりました。もっと交流したかったです。団長も言っていましたが、もし一泊くらい学生寮に泊めてもらうことができれば、彼らとさらに深い話ができたとと思います。地方の都市も予想以上に大きく経済発展を遂げていて、すごいと思いました。

□□□ 出発前夜、中国大使館が壮行会 □□□

訪中団が出発する前日の 8 月 31 日夜、中国大使館は盛大な壮行会を開いた。

壮行会には、程永華大使、韓志強公使をはじめとする多くの大使館職員が出席し、協会からは岡崎温理事長らが出席した。あいさつに立った

程大使は「中日両国の青年が、理解と相互信頼の懸け橋を強固にして初めて両国関係は原動力を得てまい進できる。今回の訪中の機会を大切にし、中国の各地を訪れて様々なこ

とに耳を傾け、思い、考え、自身の体験に基づいて中国に対する客観的で『立体的な』イメージを築いてほしい」と述べた。岡崎理事長の音頭で乾杯が行われると、その後程大使は学生たちに気さくに話しかけ、激励の言葉を贈った。

一方、韓公使は「数ある中日青年交流の中で、今回は中国大使館が企画した初の訪中団。中日交流全体に勢いをつけたいと企画した。ぜひ、中国との付き合い方を考える機会にしてほしい」と述べた。



学生に囲まれる程永華駐日中国大使